



Title	北海道大学における日本語補講プログラムデザインのための基礎調査
Author(s)	小林, 由子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 3, 135-151
Issue Date	1999-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45581
Type	bulletin (article)
File Information	BISC003_009.pdf



[Instructions for use](#)

北海道大学における日本語補講 プログラムデザインのための基礎調査

小林 由子

要 旨

留学生センターの日本語補講コースは、どのような役割を持つべきであろうか。北海道大学留学生センターでは、全学の研究留学生を対象に「全学日本語」という日本語補講コースを開講しているが、学生の専門領域とどのように関わっていくべきかはまだ議論されていない。1996年に行われた指導教官への意見調査では留学生の日本語に対して多様なニーズがあることが示唆されている。本稿では、全学向け補講コースの方向性を明確にするための基礎資料を提供することを目的とし、学生の「全学日本語」受講状況と、1996年の調査を裏付けるための教官に対するインタビュー調査から考察を行う。「全学日本語」受講歴を見ると、受講期間は大半が1年以内であり、初級のみを学習する者と中級を学習する者が分化している。この結果は、学習者の日本語学習期間が限られていること、学習者はそれぞれの日本語能力に合ったレベルを選択し参加できる期間内で必要な技能を学習していることを示唆している。一方、理系の指導教官によると、研究のための専門的な日本語の教育は同一学部内でも専門によるばらつきが大きいと、講座の作業を通じて行われることが多い。また、発表・論文は英語でもよいことが多いと、留学生には主に日常的な場面でコミュニケーションがとれる日本語が要求されている。学習者の専門のばらつきや専門教官のニーズを考えると、現行の全学補講コースでは専門別の日本語よりも、ある程度広いレベルの専門に共通する日本語技能を養成していくのが適当であろう。

〔キーワード〕 補講コース、指導教官、日本語履修歴、専門日本語教育

1. はじめに

北海道大学では、平成9年度4月より「全学日本語」という名前で全学の研究留学生を対象とした日本語補講コースを開講している¹⁾。研究留学

生向け補講コースのカリキュラム作成上の問題のひとつとして、受講生の専門的な研究のための日本語をどこまで支援するかがある。すなわち、一般的な日本語能力を育てることが必要なのか、それとも学生の専門分野に踏み込んだ日本語教育までも視野に入れなければならないのか、あるいは、どの程度のレベルのどんな日本語が研究生活において要求されているのかを意志決定しなければならない。

Swales (1989) は、サービスの性格を持つ EAP (English for Academic Purpose) のプログラムデザインに関わる問題を分析した後、コースをとりまく環境とコース内のありかたを一種の生態系として総合的に捉え、そのシステムの中で、「しない余裕がない (しなければならない) ことがら」「する余裕がある (してもよい) ことがら」「しない余裕がある (しなくてもよい) ことがら」「する余裕がない (できない) ことがら」は何かということによって、プログラムデザインの意志決定をすべきであるとしている。

「全学日本語」は、まさにサービスの性格を持つ JAP (Japanese for Academic Purpose) のプログラムである。Swales の見方によれば、「全学日本語」のプログラムデザインにあたっては、許される時間・場所・費用などの実施条件の中で、プログラムをとりまく環境、すなわち、学習者である留学生の研究との関わり方を考慮していかなければならない。

北海道大学留学生委員会の『外国人留学生受け入れと教育・指導に関する意見調査報告書』(1996) は、留学生の指導教官の留学生の日本語に対するニーズが多岐に渡っていることを示したが、量的なデータはある程度得られたものの具体的な情報は少なかった。プログラムデザインのためには、指導する立場からの質的な情報と、留学生がどのように「全学日本語」コースを利用しているかについてのデータが必要である。

そこで、本稿では、過去2年半の「全学日本語」受講者の学習履歴と留学生を多く抱える部局の留学生教育専門教官・指導教官への聞き取り調査をもとに、「全学日本語」のとるべき方向性を検討する。

2. 「全学日本語」受講者の受講状況

研究留学生は多忙な研究の合間をぬって「全学日本語」を受講している。平成11年度4月期の受講者のべ298名(複数科目を受講する学習者を重複して数えた数)のうち、既に38名が多忙を理由に途中で受講放棄の届け出

をしている。受講を放棄しないまでも実験・調査・学会を理由に欠席する者は少なくない。

北海道大学の留学生センターの日本語補講コースは、「全学日本語」の前身である「一般日本語」から数えて9年の歴史を持つが、多忙な中で受講者がどのような科目をどのぐらいの期間どのような組み合わせで履修しているかについては、今まで調べられてこなかった。

学習者の履修期間や履修科目は、学習者の日本語のニーズ・学習背景がある程度反映すると考えられる。もし多くの学習者が高いレベルの日本語能力を必要としているのならば、初級からはじめた学習者も中級まで日本語を学ぶことになり、学習期間は長くなるだろう。また、高いレベルの日本語が必要ない学習者が多いか、科目内容が学習者のニーズと合わない場合には、履修者は少なくなるだろう。

2.1 「全学日本語」の開講科目および時間割

表1は、「全学日本語」の開講科目と時間割を示したものである。「全学日本語」は、大きく初級クラス・漢字クラス・中級クラスに分けられる。初級クラスと中級クラスの同時受講は認められていないが、漢字クラスは初級・中級のいずれの学生も受講可能である。初級は1科目4レベル（1期9週間、4・7・10・1月の年4回開講）、漢字は1科目3レベル（1期18週間、4・10月の年2回開講）、中級は技能別4科目（文法・口頭表現・読解・文章表現）3レベル（1期18週間、4・10月の年2回開講）、合計19種類のクラスが週当たり合計36コマ（1コマは90分）開講されている。受講者のレベルは全学日本語を始めた時点でのプレースメントテストと進級テストの結果によって決められる。初級の履修者は漢字も含めて週当たり最大5コマ、中級の履修者は最大8コマの履修が可能である。日本語の初心者、順調に進級すれば4期、1年間で中級に進むことができる。中級は初級修了程度からおおむね日本語能力試験2級程度を想定している。

表1 「全学日本語」開講科目と時間割

	月		火	水		木	金	
8:45	初級 1.3	中級 文法 1.2.3	漢字1.2.3	初級 1.3	中級 文法 1.2.3	漢字1.2.3	初級 1.3	中級 文章 表現 1.2.3
10:15								
10:30	初級 2.4			中級 口頭 表現 1.2.3	初級 2.4			中級 口頭 表現 1.2.3
12:00								

(4・10月期の時間割、7・1月期は初級の時間が逆になる)

2.2 受講者の概要

平成9年度4月期から平成11年度4月期までの「全学日本語」の受講者数は、合計469名(男性315名、女性154名)である。

国別に見ると、最も多いのが中国で125名、次いで韓国62名、アメリカ32名、インドネシア・バングラデシュ各23名、ミャンマー15名、フィリピン13名、カナダ12名、タイ・ブラジル9名、イギリス・エジプト・台湾8名、スウェーデン・パキスタン7名、インド・ルーマニア6名、ハンガリー・モンゴル5名、オーストリア・フランス4名、アルゼンチン・イタリア・ウクライナ・パラグアイ・ブルガリア・ペルー3名、ウルグアイ・エチオピア・コロンビア・スイス・チェコ・ポーランド・マレーシア・メキシコ2名、アイルランド・アゼルバイジャン・アフガニスタン・アルジェリア・ウズベキスタン・オーストラリア・オマーン・カザフスタン・ガーナ・ケニア・コートジボアール・ザンビア・スーダン・チュニジア・チリ・ニュージーランド・フィンランド・ベトナム・ベルギー・ボリビア・マダガスカル1名となっている。そのうち、漢字圏が35.2%、非漢字圏が64.8%である。なお、北海道大学全体では、漢字圏の留学生の割合は43.7%(平成11年5月1日現在)である。

表2は、平成9年4月期から平成11年度4月期までの過去2年半の受講者の概要を所属・身分別に示したものである。身分は最も新しい登録データにもとづいている。身分の「その他」には、HUSTEP(学部レベルの短期留学プログラムの学生)、日本語日本文化研修生(学部レベル)、文学部の科目等履修生が含まれる。「不明」は書類に記載がなかったものである。

表2 所属別・身分別に見た「全学日本語」受講者

	研究生	修士	博士	研究員	教員	その他	身分不明	合計
HUSTEP						24		24
日本語 日本文化研修生						4		4
教育学部	11	3	3	1			1	19
経済学部	13	1						14
言語文化部	1			1	4			6
文学部	11	2	1	2	3	3		22
法学部	9	2	2	2	3		1	19
スラブ研	3			6		1		10
医学部	6	1	14	6			6	33
工学部	28	23	22	13			8	94
歯学部	2		6	1			1	10
獣医学部	11		7	3			6	27
水産学部	1							1
地球環境科学 研究科	4	8	9	2	1		4	28
農学部	24	20	16	16			9	85
薬学部	1		1				1	3
理学部	3	2	9	4	1		9	28
触媒研				1			3	4
低温研	1						5	6
電子研	1		2	1				4
免疫研	2		2					4
所属不明							24	24
合計 (%)	132 (28.1)	62 (13.2)	94 (20.0)	59 (12.6)	12 (2.6)	32 (6.8)	78 (16.7)	469 (100)

所属は、不明が5%あるが、文系（教育・経済・文・法学部、言語文化部、スラブ研）の受講者の比率は19.5%で、北海道大学の留学生全体における文系の比率（20.5%）とあまり変わらない。

身分は、不明が16.7%あるが、研究員・教員を除いた受講者に対する比率は、研究生が33.1%（受講者全体で北海道大学全体では13.8%）、修士課程が16.8%（同18.7%）、博士課程が23.6%（同50.2%）となっており、

大学全体の留学生の比率に比べて、研究生が多く、博士課程の学生が少なくなっている。また、研究員・教員（定員に余裕があればという条件付きで受講を認めている）が合わせて14.6%になっている。

2.3 各クラスの登録・修了状況

表3は1997年4月期から1999年4月期までの学期毎の登録人数と1999年1月期までの修了（70%以上出席し所定の成績を修めた者）人数をクラス別に示したものである。

表3 クラス別登録人数 * () は修了人数

科目	レベル	平成9年度				10年度				11年度
		4月期	7月期	10月期	1月期	4月期	7月期	10月期	1月期	4月期
初級	1	(6)	8(7)	17(15)	11(8)	13(8)	6(4)	19(15)	22(18)	13
	2	(6)	10(9)	17(14)	13(11)	23(19)	13(9)	18(16)	18(11)	16
	3	(3)	10(10)	13(11)	15(10)	14(13)	21(19)	19(13)	16(13)	13
	4	(5)	9(5)	10(9)	15(10)	8(7)	15(9)	14(10)	13(12)	15
漢字	1	6(4)		19(16)		14(4)		13(8)		10
	2	14(7)		21(14)		27(22)		25(19)		20
	3	12(6)		20(13)		23(15)		24(16)		25
中級 文法	1	9(5)		19(13)		15(11)		15(10)		19
	2	13(8)		21(12)		19(15)		24(13)		18
	3	16(5)		13(7)		15(6)		24(9)		17
中級 口頭 表現	1	13(9)		24(16)		15(8)		26(18)		19
	2	13(7)		20(15)		12(9)		16(11)		20
	3	10(3)		11(7)		15(8)		15(9)		15
中級 読解	1	10(6)		16(12)		19(13)		20(11)		19
	2	19(6)		15(7)		15(5)		27(11)		17
	3	12(5)		8(6)		11(5)		10(3)		10
中級 文章 表現	1	13(6)		22(12)		21(8)		19(5)		24
	2	10(5)		13(5)		15(5)		17(4)		13
	3	6(3)		7(3)		12(7)		14(6)		11

*平成9年度4月期初級1は登録者の記録なし

受講人数は、期によって変動があるが、平成9年度10月期から、短期留学プログラムが始まり「全学日本語」がその日本語研修を行うことになっ

たためか、受講者が増加している。全体的な傾向としては、中級読解・文章表現の上のレベルは比較的受講者が少なく、漢字の上のレベル、中級口頭表現・文章表現の下のレベルは受講者が比較的多い。

修了者の比率は期・科目によって変動があるが、修了できなかった理由の大半は出席回数不足によるものである。

2.4 受講レベル

表4は、受講レベル毎に見た受講者を「全学日本語」での学習開始時期によって分けたものである。「初級」はこの2年半に初級のみを受講している学習者、「漢字」は漢字のみ、「中級」は中級のみを受講している受講者を示す。

表4 受講レベル・開始時期別受講者数

	初級	初級・漢字	初級・中級	初級・中級・漢字	中級	中級・漢字	漢字	合計
9年度4月期	10	2	3	4	43	20	6	88
9年度7月期	9	1	5	3				18
9年度10月期	13	12	5	8	35	23	3	99
9年度1月期	8	1	5	3				17
10年度4月期	10	9	2	8	13	16	2	60
10年度7月期	7			2				9
10年度10月期	19	17	1	8	20	11	3	79
10年度1月期	20	2		1				23
11年度4月期	15	5			20	19	1	60
11年度7月期	16							16
合計	127	49	21	37	131	89	15	469

初級・中級両方を受け入れる4・10月期は、60～99名が学習を開始したが、平成9年度に比べ、平成10年度以降は減少している。初級のみ受け入れの7・1月期は、20名前後が学習を開始しているが、ばらつきが大きい。

受講レベル別に見ると、初級は受けたが中級には進まない受講者が176名で37.5%、初級から中級へ進んだ受講者が58名で12.3%、中級から受けた受講者が220名で46.9%、漢字のみを受講した者が15名で3.2%を占めている。

2.4 受講期間

表5は、受講者を受講レベルと受講期間により分けたものである。

表5 受講レベル・受講期間

	初級のみ	初級・漢字	初級・中級	初級・中級・漢字	中級のみ	中級・漢字	漢字のみ	合計
0.25年	50							50
0.5年	32	15			87	46	9	189
0.75年	25	5		2				32
1年	13	25	4	14	32	29	4	121
1.25年	6		7	4				17
1.5年		3	4	7	11	9	2	36
1.75年			2	2				4
2年	1	1	1	5	1	4		13
2.25年			1	1				2
2.5年			2	2		1		5
合計	127	49	21	37	131	89	15	469

受講者469名のうち、受講期間が1年以下の者は389名で全体の82.9%を占める。残る80名(17.1%)が1年を超えて受講している。初級から中級に進んだ者の65.5%は1年を超えて受講している。

また、0.25年で辞めている者50名のうち、13名が平成11年度7月期に受講を開始した者(原稿執筆時点で履修継続期間が0.25年未満)、3名が受講開始時に初級4に配置され初級終了後中級に進まなかった者である。初級を修了しなかった残る34名のうち、研究員が18名で半分以上を占めている。

2.5 受講科目数

表6は、この2年半の受講生1人あたりの受講科目数を受講期間別に示したものである。また、表7～11は、受講科目数別に見た受講レベルと受講期間である。ここでいう科目とは初級・漢字・中級文法・中級口頭表現・中級読解・中級文章表現をさす。6科目受講している者はこの全科目を受講していることになる。また、中級を受けていない者は受講科目数が3科目より多くなることはない。

表6 受講科目数・受講期間

	1科目	2科目	3科目	4科目	5科目	6科目	合計
0.25年	50						50
0.5年	89	50	23	16	11		189
0.75年	25	5	1		1		32
1年	26	42	14	17	16	6	121
1.25年	6	3	2	3		3	17
1.5年	2	9	10	4	8	3	36
1.75年			2	2			4
2年	1	2	1	2	7		13
2.25年				1		1	2
2.5年				2	2	1	5
合計	199	111	53	47	45	14	469

表7 1科目受講している者の受講レベルと受講期間

	初級	中級	漢字	合計
0.25年	50			50
0.5年	32	48	9	89
0.75年	25			25
1年	13	9	4	26
1.25年	6			6
1.5年			2	2
2年	1			1
合計	127	57	15	199

表8 2科目受講している者の受講レベルと受講期間

	初級・漢字	初級・中級	中級	中級・漢字	合計
0.5年	15		20	15	50
0.75年	5				5
1年	25	3	9	5	42
1.25年		3			3
1.5年	3	1	5		9
2年	1	1			2
合計	49	8	34	20	111

表9 3科目受講している者の受講レベルと受講期間

	初級・中級	初級・中級 漢字	中級	中級・漢字	合計
0.5年			11	12	23
0.75年		1			1
1年	1	1	8	4	14
1.25年	2				2
1.5年	2	2	2	4	10
1.75年	1	1			2
2年				1	1
合計	6	5	21	21	53

表10 4科目受講している者の受講レベルと受講期間

	初級・中級	初級・中級 漢字	中級	中級・漢字	合計
0.5年			8	8	16
1年		4	6	7	17
1.25年	2	1			3
1.5年			4		4
1.75年	1	1			2
2年		1	1		2
2.25年	1				1
2.5年	2				2
合計	6	7	19	15	47

表11 5科目受講している者の受講レベルと受講期間

	初級・中級	初級・中級 漢字	中級漢字	合計
0.5年			11	11
0.75年		1		1
1年		3	13	16
1.5年	1	2	5	8
2年		4	3	7
2.5年		1	1	2
合計	1	11	33	45

1科目の受講者が全体の42.4%、2科目が23.7%、3科目が11.3%、4科目が10%、5科目が9.6%、6科目が3%で、受講科目数が2科目以下の者が全体の66%を占める。

1科目のみの受講者では、初級のみ学習し中級へ進まない者が63.8%、中級のみ受けている受講者が28.6%を占める。2科目の学習者のうち、初級のみで中級へ進まない者は44%である。初級から中級へ進む者が少ないことは2-4でも示したが、受講科目が3科目を超える場合、つまり、必ず中級を受講している場合は、初級を受講せず中級から受講を始めた者の比率が増し7割以上を占める（3科目79.2%、4科目72.3%、5科目73%）。

中級の受講者の数は表4・5から合計278名であることがわかるが、そのうち、1科目受講した者は57名で20.5%、2科目の者は62名で22.3%、3科目の者が53名で19.1%、4科目の者が47名で16.9%、5科目の者が45名で16.2%、6科目すべて受けた者が14名で5%を占める。中級の受講者の受ける科目の数にはばらつきがある。

受講期間は、受講科目数が少ない（1～2科目）の場合、受講期間が1年以下である者が92%（310名中287名）を占める。3科目以上受講している場合も受講期間が1年以下である者が多いが、科目数が増えるにつれ、1年を超える受講者の比率がやや増す。（3科目28.3%、4科目29.8%、5科目37%、6科目57.1%）。

初級から中級へ受講を継続する者の中には、長期にわたって学習を続ける者が存在する。

3. 教官から見た留学生の日本語二一ズ

3.1 留学生委員会の調査

北海道大学留学生委員会は、1996年に全学の教官（講師以上）とチューターを対象に質問紙調査を行い、「外国人留学生受け入れと教育指導に関する意見調査報告書」をまとめた²⁾。対象となった教官は1368名であったが、そのうち64.5%、883名から回答があった。

この報告書によると、回答のあった教官のうち、約6割が留学生が研究室内で日本語で意志の疎通をはかっていると答えている。また「留学生は日本語のゼミに参加している」には約8割が、「日本語の講義に参加して理解している」には約4割が、「日本語で発表している」には約7割が、「日本語の文献を読んでいる」には約5割が肯定的な回答をしている。し

かし、日本語に関する自由記述意見（139件）を見ると、日本語が不十分なためにコミュニケーション上のトラブルがあった、英語ができれば十分、漢字は必要ない、読解の指導をしてほしい、論文指導をしてほしい、日常会話程度の日本語で十分、など、教官側からの日本語に対する要望は多岐にわたっている。

3.2 専門教官からの聞き取り

そこで、留学生を多く受け入れている学部（工学部2名、農学部、理学部、獣医学部、文学部各1名、合計6名）にインタビューを行った。主な内容は、研究室での留学生の日本語使用状況、研究室での日本語指導状況、留学生の日本語使用についてのトラブルについてで、所要時間は1人あたり1時間～1時間半である。

研究室での日本語使用状況については、理系では学部を問わず以下のような同様の回答を得た。すなわち

- 文献購読の文献・論文はほとんどが英語であるため、専門の読み書きの日本語はあまり必要ない。
- 実験系では、日本人とチームを組んで仕事をするため、実験を遂行していくためのコミュニケーションの日本語が不可欠である。特にわからないことを聞いたり、指示を受けたりする日本語が必要である。
- 同じ学部でも専攻が異なると使う語彙が全く異なるため、学部毎の専門日本語教育は不可能である。
- 専門の日本語は、むしろ講座単位で仕事をしながら覚えていくのが有効であろう。
- 学会発表を日本語で行うときの練習は講座で行っている。
- 留学生センターで教える日本語は基礎的なコミュニケーションのための日本語として意味がある。

また、理系の教官から個別に出た意見としては、次のようなものがある。

- 日常のコミュニケーションで英語を使うかどうかは研究室の雰囲気により違いがある（1学部）
- 研究室では初級の集中コース修了程度で十分である（1学部）
- 修士課程では講義があるので講義を聴く日本語が必要ではないか（1学部）

- 短期の集中コースがあってもいいのではないか（1学部）
- 日本語のルールを教えることは難しい（1学部）

文系の学部は1つだけであったが、理系とは大きく様相が異なっている。

- 学科によって若干異なるが、文献購読、発表、論文はほとんど日本語である。
- ほとんどの学生は日本語ができる状態で入学してくるため、問題はあまりない。

総じて、理系の学部では、専門の日本語ではなく日常的なコミュニケーションのための日本語が必要であること、専門の日本語は研究室単位で対応していること、文献購読・論文は英語であることが多いということが特徴のようである。一方、文系では、研究生活はほとんど日本語で行われるが、日本語の既習者が多い。ただし、文系に関しては、異なる分野のさらなる聞き取りが必要である。

4. 考察

4.1 受講状況と指導教官の見解から

「全学日本語」の受講状況は、以下のようにまとめられる。

- 身分別に見ると、大学全体の比率に比べて研究生の比率がやや高く、博士の比率がやや低い。
また、研究員・教員が15%近くを占める。
- レベル別に見ると、初級を受け中級に進まない受講者が38%、中級からの受講者が46.7%いる。初級から中級へ進む者は12.3%とあまり多くない。
- 受講期間は1年以下の者が全体の82.9%を占める。
- 受講科目数は2科目以下の者が全体の66%を占める。
- 中級受講者の受講科目数にはばらつきがあり、ある特定の科目だけを受講する者と、様々な科目を受講する者がある。
- 3科目以上受講していても、受講期間は1年以下の者が多い。
- 一部の受講者は長期間多くの科目を受講している。

特に、初級から中級へ進んだ者は6割以上が1年を超えて受講している。

受講期間が1年以下の者が多い理由としては、

- 長期間受講を続けることが不可能
- 日本語のコース内容が長期間続けるのに不適当

の二つが考えられるが、研究生の比率がやや多いこと、研究多忙を理由に受講を中断する者が少なくないことは、日本語補講が本格的な研究を始める前の準備期間に履修されており、本格的な研究を始めると日本語学習の継続が難しくなる可能性を示唆している。

また、初級から中級へ進む者の比率が少ない理由としては、

- 初級だけで十分である
- 中級の科目内容が初級から進むのに不適當

が考えられるが、理系の指導教官が日常生活で役に立つ程度の日本語を期待していること、受講期間が1年以下の者が多いこと、研究多忙を理由に受講を中絶する者が多いことから、研究室でそれほど高度な日本語が要求されない場合には、初級でやめてしまう者が多いのではないかと考えられる。中級から受講する者が約半数おり、比率は少ないとはいえ多くの科目を1年を超える長期間受講する者も存在するので、中級の科目内容が不適當とはいき切れない。ただし、このことを実証するためには、科目内容の適切さが検証されなければならない。

初級から中級に進む受講者が全体の1割強であり、中級に進まない者、中級のみ受講する者がほぼ半々であるということは、初級から学習を始める受講者と中級から始める受講者が分化しているということである。8割の受講者の受講期間が1年以内であるということは、受講者が限られた期間で自分のレベルに合った科目をとっていることになる。

留学生委員会の調査報告書では、指導教官により要求する日本語のレベルが異なっている。また、文系学部では理系より高度な日本語を要求される。研究室で発表・文献購読・論文作成などに日本語を要求される場合は、留学生はある程度長い期間、多くの科目をとることになるのではないかと考えられる。

4.2 「全学日本語」の役割

大学における日本語補講のありかたとしては、専門教育を視野に入れたものと入れないものがある。北海道大学の場合には、学生の専門分野の幅が広くすべてに対応することは困難であり、また、同じ学部内でも専門日本語をまとめて行うことが困難であることが理系の教官から示された。北海道大学の留学生の8割は理系であるが、理系で主に期待されているのは、専門のための日本語ではなく、日常のコミュニケーションのための日本語

である。

しかし、一部の研究室ではより高いレベルの日本語が要求されているという報告もあり、長期間多くの科目を受講する者も存在する。日常的に使う初級レベルの日本語だけではなく、ある程度高いレベルの日本語も提供することが必要である。

Swales (1989) の枠組みで言えば、「しなければならないこと」は、日常的なコミュニケーションのための日本語および専門領域によらないある程度高度な日本語科目の提供、ということになろう。受講者が研究の準備段階で来る可能性もあることから、これらの日本語が1年以内の短期間で学べることも必要である。短期間で少しの項目を学習すればよい者と多くを学習しなければならない者の両方に対応するためには、サバイバル的な初級ではなく中上級の日本語の基礎となるような初級科目と中上級の科目が必要に応じて選択できることが望ましい。

もし、日常的な場面でのサバイバル的な日本語のみが必要とされているのであれば「サバイバル日本語」は「してもよいこと」と考えてもよいが、実施が適当であるかどうかは、教室・予算・スタッフなどの条件によるだろう。

「専門分野の日本語」は「しなくてもよいこと」あるいは「できないこと」に分類されよう。

5. 今後の課題

今回の考察は、受講者の受講状況と指導教官の意見を用いてコースの外側からあり方を検討したもので、科目の内容的妥当性には触れていない。4でも触れたように、カリキュラムの質を実証的に検証する必要がある。また、実際に留学生が研究室でどのように日本語を使用し学習しているのか、なぜ「全学日本語」を受講するのか、理系と文系の違いは何かということについても調査が必要である。

注：

- 1) 北海道大学留学生センターでは、1991年の留学生センター発足時から「一般日本語」という名前で日本語補講コースを開講していたが、1997年度より「全学日本語」に名称を変更し、コースの全面的な改革を行った。

2) 実際に報告書作成に当たったのは、喜田宏（獣医学研究科）、小野江和則（免疫科学研究所）、関道子（留学生センター）、小林由子である。

参考文献：

北海道大学留学生委員会（1996）『外国人留学生受け入れと教育・指導に関する意見調査報告書』

日本語教育学会（編）（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

Jonson, R. K., (1989) A decision-making framework for the coherent language curriculum. In Jonson, R. K. (Ed.) *The Second Language Curriculum*. Cambridge University Press

Jordan, R. R., (1997) *English for Academic Purpose*. Cambridge University Press

Swales, J. (1989) Service English program design and opportunity cost. In Jonson, R. K. (Ed.) *The Second Language Curriculum*. Cambridge University Press

Research for program design of the Supplementary Japanese Language Course at Hokkaido University

KOBAYASHI, Yoshiko

'The Open Japanese Course at Hokkaido University' is supplementary Japanese language course for post-graduate foreign students. The nature of such a course is a central issue in the Open Japanese Course curriculum. A survey by Hokkaido University student Exchange Committee (1996) suggests that foreign students have a variety of Japanese language needs, but no further research has been carried out in this question. This paper aims to discuss the role of the Open Japanese Course based on interviews with teachers and on students' learning history in the course over the last two and a half years. Japanese language training in specific academic areas occurs through work in their particular departments and the teachers in these department look for Japanese language for communication in everyday life not in academic areas. On the other hand, most students can take the Japanese language course for less than one year, and students who take elementary level and intermediate level are almost separated. This suggests that students should take appropriate level classes for a limited period as their situation allows and that some students who need higher ability take many units for long period. Based on these results the Open Japanese Course should provide units where students can gain general Japanese ability in a short period of less than one year as well as units which allow them to continue studying to gain high level Japanese for general purposes if they want.